

## 新刊紹介

## プラトンの神学と宇宙論 金松賢諒 著

本書は第一部 プラトンの神学と宇宙論——『ティマイオス』研究——と第二部 エロースと自知 から成っている。

第一部では、『神学と宇宙論』であることが究明されている。すなわち、『ティマイオス』篇の宇宙論は一方では自然哲学であり、ギリシャ科学の総合であるとともに、他方それが永遠の自覚内容と一つになっており、神話と科学とが直接に結びついているのではなく、科学性による否定的媒介を経た神話性ないし宗教性がプラトンの宇宙論の重要なモメントをなしている、と著者は考える。その論究が、本論（原典の順序にしたがってその全体の論述が(一)神、(二)必然、(三)神的因と必然因との協働の三章に分けて克明になされている)と特論（本論の中心問題でありかつ相互に関連性のある特に重要な問題、すなわち、(一)神と善、(二)必然と場所、(三)悪と人間の三問題をとりあげて詳細綿密な論考がなされている)とをふまえて序論と補説とで深到明快になされている。

第二部はエロースに関する論文二篇（Ⅰ、Ⅱ）と自知に関する論文二篇（Ⅲ、Ⅳ）から成っている。先ず『酒宴』篇に拠ってエロースの形而上の意味が究明されている（Ⅰ）。知恵とは惜しみなきエロースによって自己の内奥から生み出し、自ら観るべきも

のである。ソフィストの思っているように外から植えこむことのできるものではない。生み、観る力は各人に親しく本具しているものであるが、無教育者はその視力の方向を誤っている。これを正しき方向へ、すなわち永遠に向って「転回」せしめ、助産するところが教育に他ならない。かかる意味での教育とエロースがソクラテスにおいては不二体となっていることが、次に、『弁明』篇に拠って論究されている（Ⅱ）。さらに著者は、「自己を知ること」「自知」の問題を探究して『カルミデス』篇を考察し、そこに自知と善の知との一致の暗示を觀た（Ⅲ）のち、『メノン』篇の「想起」としての知において、すなわち、自己の超時間的・永遠の根源からの知識の産出としての自知において『カルミデス』篇の自知が深化され根拠づけられているのを觀る。知識は想起として、自己の内奥にある「有るものらの真理」の自知であると同時に、「原因の思量」として、われわれの存在・認識・実存の根拠たる「善」の知であるから、「自知」と「善の知」とは一致することになる（Ⅳ）。

以上、簡単に論旨の紹介を試みたが、いずれの論文も著者が永年原典に親しんでこられた成果であり、しかも単なる論文集ではなく、第二部の諸論文が相互に密接に関連し合っているように第二部と第一部も深く関連し合っているのである。著者の探究の道程からすれば、第二部から第一部へであるが、第二部は第一部を前提としているという意味では、第一部から第二部へなのであって、両者相俟って一全体をなしているのである。（箕浦恵了）

（昭和五十一年四月 法蔵館発行 A5版二二四頁）